地質ニュース502号，6頁，1996年6月
Chishitsu News no.502, p.7-13, June, 1996

—巻頭エッセイ—

研究と思いやり

野　田　徹　郎[1)]

私ごとであるが，今年の3月いっぱいまで2年3カ月にわたり，地質調査所の企画室に席を置いていた．研究の現場を離れたポジションであったことで，研究活動のあり方を再認識することができた気がする．認識の一つは研究上の「思いやり」の大切さである．

近ごろ，また「思いやり」という言葉を耳にするようになった．ひところ，日米安保タダ乗りという批判があって，我が国も応分の負担をすべきとされた．これが「思いやり予算」として実現したのは一昔前のことである．逗子の池子の森での米軍向け住宅の建設もその一例である．今回は，沖縄の普天間基地の撤去にかこつけて，嘉手納や岩国への移転の費用や新しい施設の費用は日本で持つべきという議論がある．これが前の措置と同じ発想に基づくものであることから，「思いやりの一環」と表現されたりする．

この「思いやり」の用例が適切かどうかには異論もあろうが，「思いやり」という言葉は，本来よい意味を持つ．「思いやり」は「思い遣り」であり，「思い」を「遣わす」，つまり「心遣い」と同義である．我々が人と付き合いながら社会生活を営む以上，真の意味の「思いやり」が必要な局面は随所にある．研究者が研究を行う上でも同じことが言える．

研究発表会でのディスカッションは，意義ある習わしである．その討論時間に，眉をひそめたくなる言動を目にすることが少なくない．発表者も聴衆も研究者であるから，その思うところや手法が違うのは当たり前のことであるし，議論を戦わせるのは当然である．問題は，そのときの態度である．まず第一に質問なり議論を持ちかけるときの口の利き方である．いきなり切り口上で質問を発し，発表者が質問の意図を図りかねて立ち往生する場面によく出くわす．また自説に固執したコメントを発し，頑として発表者に自説をのませるまで譲らない光景もしばしば目にする．

人との対話のマナーやテクニック（話術）は，研究発表会での討論においても重要である．いきなり「○○とは何か，どういう意味か．」と切り出すより，なぜ質問するかの趣旨を述べた上で，「○○について説明した方が，理解が得られるのでは」と言った方がよいし，「あなたの説は間違っている．」と一刀両断するより，「私はこう考えるが，その点，△△を検討したらよいのでは」と，やんわりとガイドラインを与えれば，発表者も快く応答できる．

かえって学識経験豊かな研究者の中に，妥協をしない独善的で意地悪な質問を発する者がいるのは困ったものである．若手研究者がこういう仕打ちに見舞われると，一時的にせよめげてしまう．このような相手の欠点や至らなさを揚げつらうやり方（否定的論議 negative campaign）は，相手をおとしめるには効果的であるが，それからは協調的な発展という生産性は期待できないし，発言者の品性をも自らおとしめる仕業である．

我々が，多様化した高度な知識を学習し，それを土台に知恵を出して新しい学説や解釈を打ち立てるには，許される時間に限りがある．効率的に時間を使いたいものである．そのためには論文，インターネット，学会での討論などを通じて知識や多様な考え方を身に付け，お互いの研究に協力と刺激を与え合わねばならない．そのときのあるべき基本的態度は，まず相手は何を考えているかを善意に考えてみる，つまりは「相手の心に自分の思いを遣る」ことである．人の欠点をあら探しし，他人を出し抜く喜びより，協力により成果が得られたことで周囲に感謝する生き様の方がはるかに心は豊かである．「思いやり」のある協調的な研究活動を実践し，少しでも世の中に役立つ成果を産み出したいものである．

1）地質調査所 環境地質部

キーワード：研究活動，思いやり